

2-KP9-1 統合失調症の昏迷に対しての治療内容の検討ー入院時と退院時の処方内容の違い

○渡邊 理紗、森川 友加里、石田 喬士朗、小黑 早紀、岩田 健

多摩総合医療センター精神神経科

【目的】当院における統合失調症の昏迷群の入退院時の処方内容を比較検討する。

【方法】令和元年1月31日から令和3年12月31日までに当院精神神経科に入院した患者の内、退院サマリーの主病名が統合失調症または統合失調感情障害である患者180名を対象に後ろ向き観察研究を行った。電子カルテから対象患者の情報を調査し、昏迷群の入退院時の処方内容を比較検討した。

【結果】180名中昏迷を起こしたのは23名(男性7名、女性16名、平均年齢49歳)で全例退院時には改善した。抗精神病薬の薬剤数は入院時が0.78剤、退院時が1.4剤で有意に増えていた(t test, $p < 0.01$)。入院時に処方がない10名を除くと有意は消失した。入院時の薬剤は多い順にオランザピン(4例)、リスベリドン(3例)、アリピプラゾール(2例)、他5種(各1例)であった。退院時はリスベリドン(6例)、オランザピン(6例)、アリピプラゾール(4例)、クエチアピンとクロルプロマジン(各3例)、他5種(各1例)であった。退院時の処方内容について入院時に処方がある例とない例ではリスベリドンの使用の割合はそれぞれ15%、70%であり有意であった($p < 0.001$)。

【考察】昏迷群は入院時に処方がない場合は開始され、全体としても処方の種類が増えた。入院時に処方がないのは精神科救急で入院した例である。この群にはリスベリドンが有効であったと思われる。この群の多くは内服を自己中断しており、精神症状、昏迷が生じやすい状態だったと推測される。全体としてクエチアピンやクロルプロマジンの処方割合が増えており、この両者が有効であることが示唆された。

【結論】昏迷に対して、精神科救急で入院するような状態ではリスベリドンが有効であった。また、クエチアピンやクロルプロマジンが有効である可能性が示唆された。

2-KP9

○齋藤
社会

【目的】結果的に多
ケースも
穂の頻度
【症例】5
調症の
度入院と
拘束を要
棟内での
分安定薬
加傾向で
し内服薬
頻度が減
で減量を
うよう
【考察】ス
抗精神病
し二次的
に際して
して十分